チャレンジ

菅田　忠志

「ご苦労さまでした！　ゴールですよ」。元気な女性スタッフの声で迎えてもらったものの、引きずる足には、数個の血豆が出来ているかもしれない。

晩秋のやゝ冷気を感じる風が、まるで勲章のように流れる額の汗を心地よく冷やして離れてゆく。

周りはすっかり夜のとばりもおり、新月に近いのか月の光もなく、振りかえる山なみのシルエットが影絵のように横たわっていた。

終盤数時間の縦走路を、最後尾となった挑戦者をサポートしながら、ヘッドランプで照らして歩いてきたため、ライトの光にも最初のような勢いもない。

だが、ゴールには「完走」した参加者達の喜びと、達成感に満ちあふれた多くの顔が、広場の暗闇に照らし出されたサポートテントを囲み、晩秋のさわやかな夜空に熱気を放って、晴れ晴れと輝いている。

彼等の満足げな顔を見ていると、我々スタッフの疲労も、この夜空に消えてゆくように軽くなるから不思議だ。

毎年、関西では、職域山岳会や神戸市が主催して開かれる「六甲全山縦走登山」が恒例となっている。

ＪＲ塩屋駅からすぐ山道に入り、神戸の北に連なる六甲山系を、宝塚まで延々約56㎞を12時間前後で走破するという過酷な行事である。

私の勤務した企業でも、毎年参加者を募集し実施してきた。特に新入社員には、研修行事の一環としてこの過酷な山歩きに全員がチャレンジすることになっていたため、若者の参加者も目だったが、一方では常連となっている中高年のチャレンジパワーも年々大きくなっている。

「元気な神戸」に向かっての底力となっていることだろう。

この山歩きは、脚力・体力はいうまでもなく、そ

れ以上に気力・精神力が問われる。
途中何度か交差する下山ポイントでの誘惑を振り切り、完走の決断を繰り返しながら足を進めてゆく。
この縦走登山に毎年スタッフとして駆りだされ、伴走するようになってから久しいが、サポートといいながらも、正直なところ、毎年自分自身が体力・気力にチャレンジしてきた山歩きでもある。
「そろそろ世代交代の時期かな」と、若手部員にハッパを掛けながら、毎年「後半だけでも」といまだに軟弱なチャレンジを続けている。

最近では、何の心変わりか畑違いのことにも関心が向きはじめ、文章教室に通ったり、漢字検定にもチャレンジしはじめた。
こんな自分に、「大丈夫か?」と、もう一人の自分が冷やかしてくる。
「まあマイペースでやればいいし、新しいことへのチャレンジも楽しいから」と追い返し、今日も宿題

に頭をひねりながら、心地よい呪縛を味わっている自分を、もう一人の自分があきれた様子で眺めていた。